

分子生物学会に初の若手助成基金 助成対象者 6 人のうち女性 4 人

日本分子生物学会が初めての若手助成対象者を 2011 年 7 月 13 日に発表した。学会の名誉会員である富澤純一・元国立遺伝学研究所所長が私財を寄付した。若手研究者 6 人に 300 万円ずつが贈呈され、そのうち 4 人が女性研究者だった。「もっと型破りなテーマを期待したが」と山本正幸・東大教授は語った。

日本分子生物学会は 2011 年 7 月 13 日、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」の助成対象者を発表した。同基金は、日本分子生物学会名誉会員である富澤純一・元国立遺伝学研究所所長が私財 1 億 5000 万円を同学会に寄付して設けられた。原則 39 歳以下の若手研究者を対象に、毎年 5 人程度に 1 人 300 万円を贈呈する。第 1 回の 2011 年の助成対象者としては 6 人が選ばれた。

今回の応募は 2011 年 1 月 7～31 日に行われ、応募総数は 223 件。結果的に女性 4 人、男性 2 人が選ばれたが、審査の過程では性別が考慮されることは一切なかったという。

同基金運営委員会委員長を務めた山本正幸・東京大学大学院理学研究科教授は、審査の過程でのポイントとして、①今までに優れた業績を挙げていても既に比較的恵まれた研究資金を受けている場合などは審査における優先順位が低くなった、②研究内容が基礎的研究を志向しているかという点に重点を置いた、③ボスの下で大きなプロジェクトの一角を担うような研究よりも小さくても応募者が自分で新しい研究を切り開こうとしているプロジェクトを評価した——などの点を挙げた。

助成金の使途は「研究の推進に関係していれば、かなり自由度が大きい」としており、夫婦で研究するために全

て託児費用に充当したり、国際シンポジウム参加のための旅費に使用する事例なども対象にしたと紹介した。

ただし山本教授は「委員会にはハイリスクハイリターン型の挑戦的な研究テーマを評価しようという機運があり、従来の分子生物学の枠にとどまらない型破りな提案を期待していた。選ばれた 6 人の研究者はきちっとやればしっかり結果を出せる人だが、比較的オーソドックスな中に収まったという印象がある。それなりに面白い提案もあったが、緻密に検討されていればよかったのだが」とコメントし、今後、より挑戦的なテーマの提案がなされることに期待を示した。



日本分子生物学会は 2011 年 7 月 13 日、「若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」の助成対象者の発表会を都内で開催した。右が寄付をした富澤純一・元国立遺伝学研究所所長・日本分子生物学会名誉会員、左が同基金運営委員会委員長を務めた山本正幸・東京大学大学院理学研究科教授

基金を設けた理由について富澤氏は「1 年前に妻が亡くなり、生活するのに余剰なお金を使って役に立つことをしようと考えた。日本で問題が大きいのは少子化とデフレーションなので、その問題で困っている人をサポートできたらと思った」などと説明した。

同学会の小原雄治理事長は「科研費でも（500 万円以下の）基盤 C の成果が大きい。若い時に自由に使えるお金がもらえる意義は大きい。日本でも寄付金で基礎的な研究をサポートする実例が出てきたという面でも意味がある」などと話した。（橋本宗明）■

※ 第 1 回日本分子生物学会若手研究助成の助成対象者

- ◎ 植木紀子・Bielefeld University, Germany 博士研究員
研究題目「緑藻ボルボックス目の多細胞化に伴う走光性の進化：改良トランスポゾンタギング法による機能欠損変異体作製と遺伝子機能解析」
- ◎ 大澤志津江・神戸大学大学院医学研究科細胞生物学グローバル COE 研究員
研究題目「細胞競合の分子機構の遺伝学的解析」
- ◎ 久原篤・甲南大学理工学部生物学科講師
研究題目「線虫 C.エレガンスをもちいた環境情報の識別と適応の分子機構の解析」
- ◎ 佐野浩子・お茶の水女子大学 お茶大アカデミック・プロダクション特任助教
研究題目「ショウジョウバエの fat body を用いた脂質代謝制御および内分泌機能の解析」
- ◎ 茶谷絵理・神戸大学大学院理学研究科化学専攻准教授
研究題目「アミロイドーシスの伝播を担うアミロイド自己複製反応機構の解明と制御」
- ◎ 丹羽隆介・筑波大学大学院生命環境科学研究科助教
研究題目「セロトニン産生神経依存的なステロイドホルモン生合成制御と発育プログラムの適応的調節」

科学

(月・木掲載)

✉ kagaku@asahi.com

三畳紀大絶滅 原因はメタン?

2億100万年ほど前の三畳紀末期の大絶滅について、大気中へのメタンの大量放出が原因とする説を、欧州の研究チームが米科学誌サイエンスに発表した。地球では白亜紀など生物の大絶滅が起き、三畳紀末は、火山活動



が原因とする説が提唱されていた。

チームはモロッコのアトラス山脈で調査を行い＝写真、サイエンス提供＝、陸生植物のろうから炭素同位体の変動を分析。この結果、パンゲア大陸の分裂に伴う火山活動が60万年続いたのに対し、メタンの大量放出は大絶滅が起きたころの1万～2万年に集中していた。有機物を多く含む地層などから放出されたと推定される。

分子生物学の若手助成に6人

元国立遺伝学研究所所長の富沢純一さん(87)が寄贈した1億5千万円をもとにした「日本分子生物学会若手研究助成 富沢純一・桂子基金」の1回目の助成対象者が決まった。独ビーレフェルト大の植木紀子研究員、

神戸大の大沢志津江研究員、茶谷絵理准教授、甲南大の久原篤講師、お茶の水女子大の佐野浩子特任助教、筑波大の丹羽隆介助教の6人に300万円が贈られる。

富沢さんは「若い時、給料袋を渡して終わり、(妻の桂子さんが)困っていたことに気づけなかった。同じ状況にある若い人をサポートできれば」と話した。



田んぼに水を張る
水の中で生きるドジョウや昆虫が増え、鳥が食べにやってくる。害虫を食べる生きものも増えて、農薬を使わなくてもよくなるという効果も出ているよ。

551

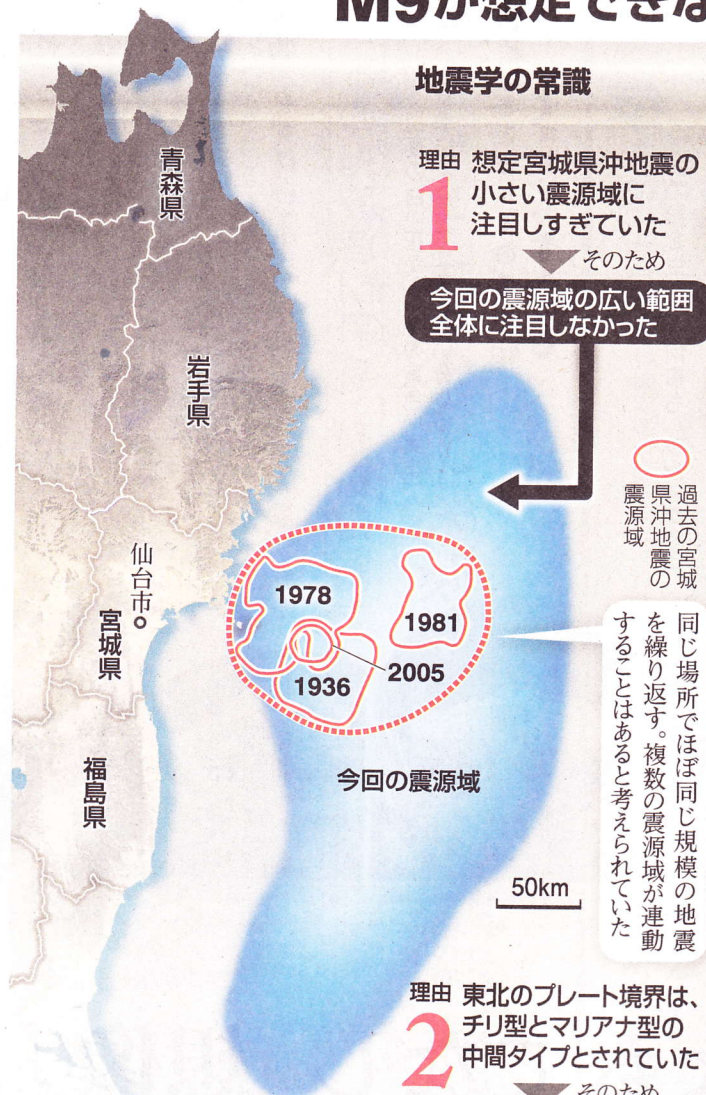
M9が想定できなかった

地震学の常識

理由 想定宮城県沖地震の小さい震源域に注目しすぎていた

そのため

今回の震源域の広い範囲全体に注目しなかった



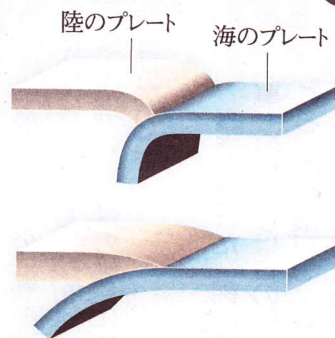
過去の宮城県沖地震の震源域

同じ場所ではほぼ同じ規模の地震を繰り返す。複数の震源域が連動することはあると考えられていた

理由 東北のプレート境界は、チリ型とマリアナ型の中間タイプとされていた

そのため

巨大地震を起こしにくいと考えた



マリアナ型

古くて重いプレートが急な角度で沈み込み、巨大地震が発生しない

チリ型

若くて浮力があるプレートが浅い角度で沈み込み、巨大地震が発生する

東北大の趙大鵬教授は、地震波を使った解析で、プレート境界の硬さを調べた。硬い場所や、軟らかい場所の境界で、大きい地震が発生することがわかった。宮城県沖では、沖合の海溝近くまで、硬い領域が広がっていた。ほかの海域と違い、巨大地震が発生する可能性を示していた。

いくつかの可能性の断片がなかったのは、M9が起きてからだった。

(瀬川茂子)

GPSプレートの結合

☆192のMの震(国土資料)